



NPO 法人 日本ビオトープ協会 (2018.5.15) ビオトープアドバイザー用 ・ 技術メモ No.6

◇継続的に技術メモ・レポートをメール添付いたします。参考にして下さい。

「新種クマノザクラについて」

NPO 法人日本ビオトープ協会
技術委員長 直木 哲

1. はじめに

サクラに関する今年の大きな話題として、2018年3月13日に国立研究開発法人 森林研究・整備機構森林総合研究所と和歌山県林業試験場が「新種のクマノザクラ」についてのプレスリリースを行いました。正式には日本植物分類学会が発行する *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* 誌に論文が受理され、69巻2号(2018年6月下旬発行予定)で公開とのことです。サクラ属では1915年にオオシマザクラの種名が発表されて依頼、およそ100年ぶりの新種発見となります。

日本におけるバラ科サクラ属 (*Cerasus*) の自生種は今まで9種(ヤマザクラ、オオヤマザクラ、カスミザクラ、オオシマザクラ、エドヒガン、チョウジザクラ、マメザクラ、タカネザクラ、ミネザクラ)であり、栽培品種はソメイヨシノをはじめとして数多くあります。紀伊半島南部(奈良・三重・和歌山県)ではヤマザクラが二度咲くと言われていましたが、森林総研の調査により、同地域に分布するヤマザクラやカスミザクラと似ているが花や葉の形態・開花期が異なり、遺伝的変異も既存のヤマザクラなど異なる野生種が確認されました。サクラ類は鑑賞価値が高ければ新たな資源として利用することも期待できます。

プレスリリースの内容と、日本樹木医会東海地区講演会資料 2018.2.10「紀伊半島で新発見されたクマノザクラ」森林総合研究所 多摩森林科学園 勝木俊雄先生の資料から引用紹介です。また今年の3月25日～27日に私が和歌山県にクマノザクラを探訪した記録も併せて記載します(これは種を同定していないためあくまで参考です)。

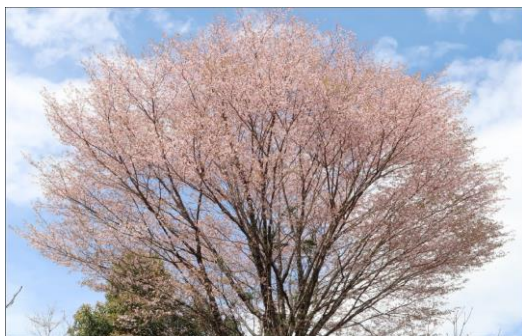


図-1 クマノザクラの樹形



図-2 クマノザクラ (先端淡紅色の花)

2. 形態的特徴と開花期

紀伊半島南部にはヤマザクラとカスミザクラも自生しているが、クマノザクラは日本産のサクラの中ではヤマザクラとカスミザクラ・オオシマザクラと共通しており、これらの種と近縁と考えられる。形態的特徴の比較は表-1で、クマノザクラは総合的にカスミザクラと共通する特徴が多く、より近縁と示唆される。しかし、クマノザクラは花柄や葉柄が無毛で葉身が卵形である点などから、花柄や葉柄が有毛で葉身が倒卵形のカスミザクラと明らかに区別される(図-3,5)。また、クマノザクラは花序の苞が狭卵形で、葉身裏面が帯白色、縁が細かい単鋸歯のヤマザクラから明らかに区別される。

表-1. クマノザクラとヤマザクラ・カスミザクラの特徴の比較			
形態	クマノザクラ	ヤマザクラ	カスミザクラ
花序柄 mm	1(-15)	5-15	1-15
花弁色	白色-淡紅色	白色	白色-淡紅色
開花期	早い	中間	遅い
苞	広倒卵形	狭倒卵形	広倒卵形
花序の花数	(1-)2(-3)	2-4	2-3
葉身長 mm	40-80	80-120	70-120
葉身幅 mm	18-36	30-45	35-60
葉縁	粗い単(重)鋸歯	単鋸歯	粗い単(重)鋸歯
葉面裏	淡緑色	帯白色	淡緑色
葉柄・花柄	無毛	無毛	有毛

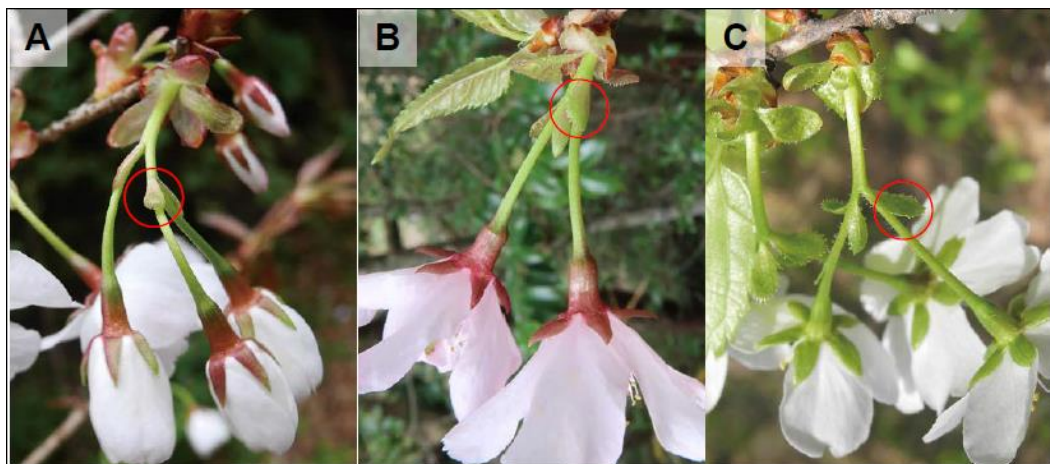


図-3 ヤマザクラ(左)とクマノザクラ(中)、カスミザクラ(右)の花序(赤丸が花序柄)

クマノザクラのもう一つの大きな特徴は、その開花期である。クマノザクラが分布する地域の人によると、この地域の“ヤマザクラ”は二度咲くということである。和歌山県古座川で調べでは、クマノザクラの開花期はヤマザクラより明らかに早く（図-4）、二度咲くという話が確認されている。クマノザクラは、より遅く咲くカスミザクラとも開花期が重なっておらず、この点からもヤマザクラ、カスミザクラと区別されることになる。

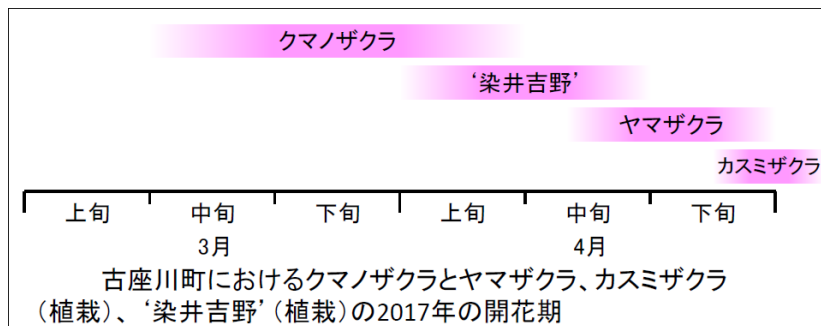


図-4 クマノザクラとヤマザクラ、カスミザクラの開花時期

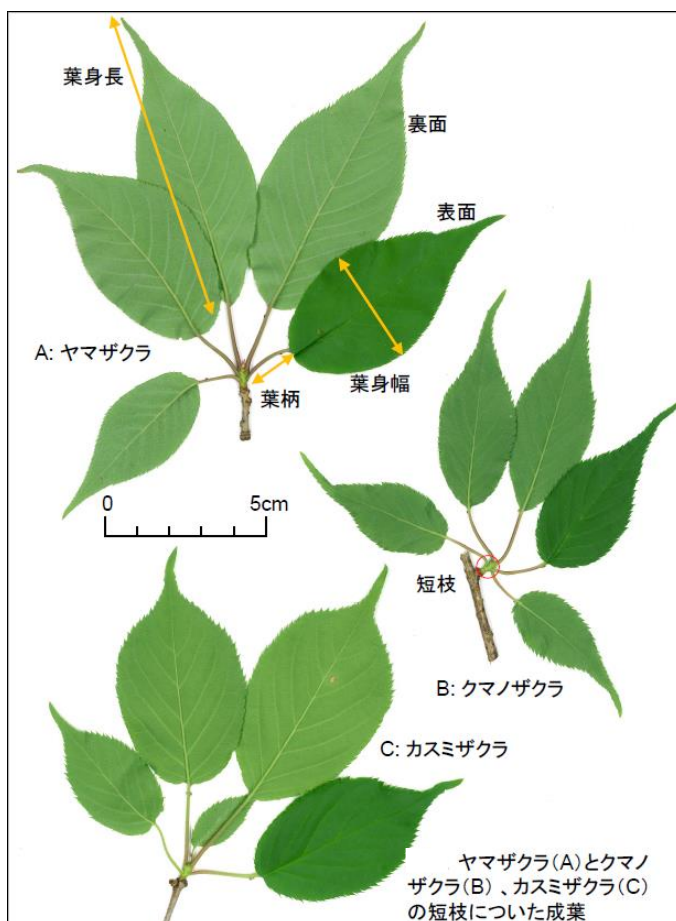
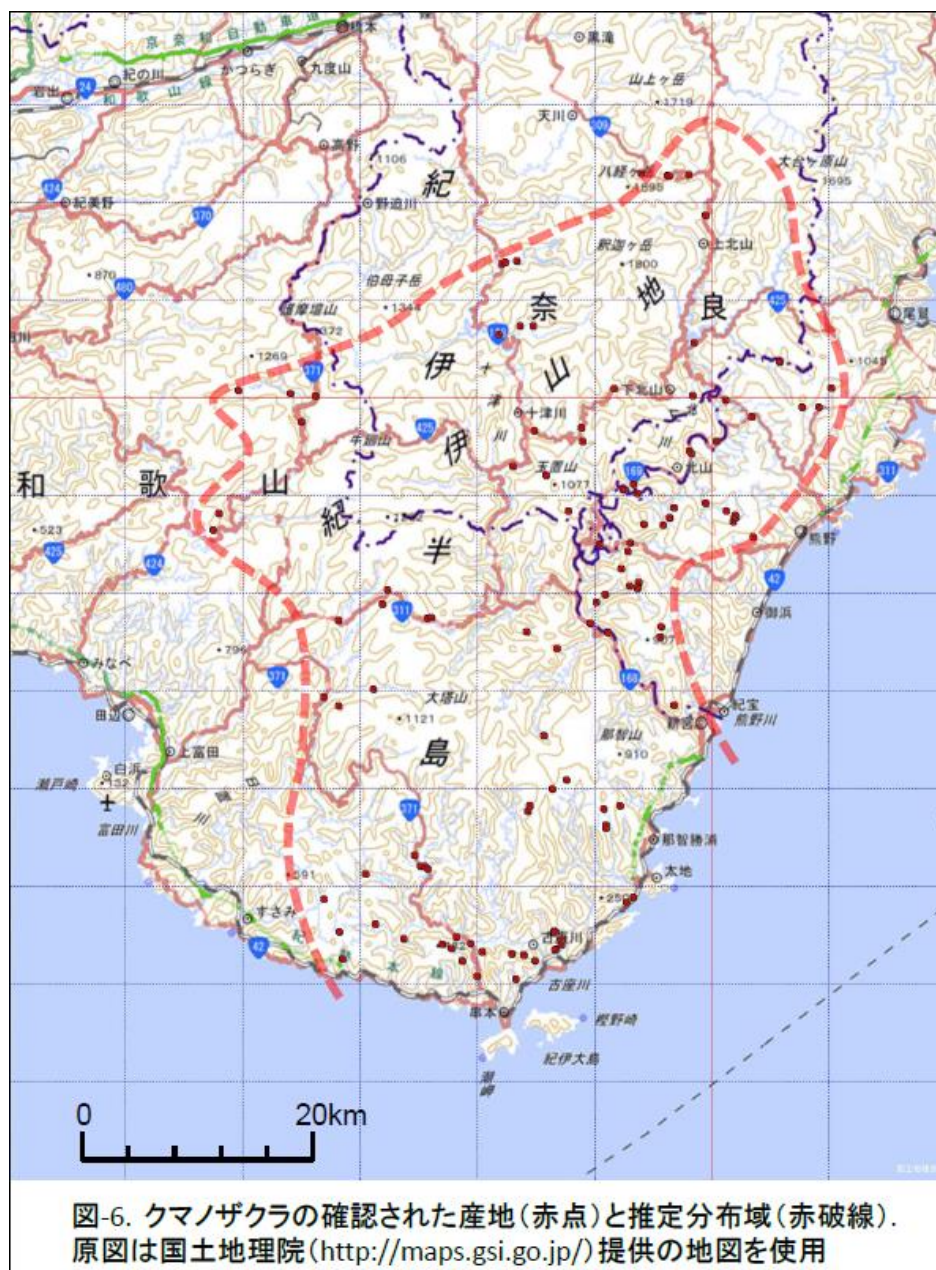


図-5 ヤマザクラ (A) とクマノザクラ (B)、カスミザクラ (C) の短枝についた成葉

3. 分布と生育環境

勝木先生らの踏破調査の結果では、クマノザクラは熊野川流域を中心に、奈良・三重・和歌山の3県にまたがるおよそ南北90km、東西60kmの範囲に分布することが確認された(図-6)。まだ暫定であり、今後の調査での修正は予想される。出現した標高はおよそ0~800mの間で、南部では海岸近くにも見られる。山地・丘陵地の尾根や斜面に広がる二次林に多く見られ、数十本が集中している集団もある。平地には少ないようであるが、平地は人為的な影響を強く受けていることから、本来の生育環境について更に検討が必要である。幹の胸高直径はヤマザクラより小型で50cm程度のものしか確認されていないが、人為的な影響(薪炭林としての定期伐採など)を考慮する必要がある。



4. 利用と保全

クマノザクラは、開花期には葉がほとんど伸びず、淡紅色の花は‘ソメイヨシノ’に似ている。また‘ソメイヨシノ’よりも開花期が早い点からも、きわめて鑑賞価値が高いと思われる。一方、地球規模の気候変動により暖地の‘ソメイヨシノ’は将来の生育が危ぶまれている。このため紀伊半島南部では‘ソメイヨシノ’に代わる鑑賞木としてクマノザクラを用いることが検討されている。‘ソメイヨシノ’の過剰な植栽による問題も、もともと自生しているクマノザクラを用いることで、解消されることが期待される。

一方、クマノザクラは紀伊半島だけに分布する希少な植物である。適切に利用していくためにも野生集団を保全することが望まれる。幸い、クマノザクラは数多くのこされており、野生集団が短期的に消失するおそれはない。ただ外部から持ち込まれたヤマザクラやオオシマザクラ、ソメイヨシノなどはクマノザクラと交雑するおそれがあり、遺伝子汚染や繁殖鑑賞が懸念される。特に和歌山県串本町の周辺では、大規模にオオシマザクラが野生化しており、その悪影響に注意しなければならない。

5. 今後の展開

サクラ属の樹種は、その系統関係が明確にされておらず、特に東南アジアにおけるヤマザクラ類は、分類学的な混乱が生じています。森林総研ではクマノザクラの遺伝学的な検討により、これらの系統関係を明らかにしていく予定です。また和歌山県林試と共同で鑑賞価値の高いクマノザクラの優良個体を選抜し、増殖方法を確立すると共に、病害への抵抗性の検定を行うことで、高品質なクマノザクラの種苗の普及が計画されています。